

平成 27 年度 北九州市発達障害者支援モデル事業報告書

成人期以降における生活支援プログラム開発

I. 事業要旨

北九州市発達障害者支援センターの相談者の中で、成人期の占める割合は高く、平成 26 年度は、987 人の相談者のうち、16 歳以上の相談者数は 539 人で、そのうち、4 分の 1 の 138 人には所属がなく、在宅生活を送っている。在宅生活を送る人の中には、学生時代や就職後の挫折経験により対人緊張や不安が非常に強い人や、障害特性により、個別の面談を重ねても、なかなか状態が改善しないケースが含まれ、相談が長期にわたって継続している状態にある。そのため、障害福祉サービス事業所の利用等が難しい相談者を対象に、発達障害者支援センター職員と共に行う作業体験等を通して社会参加に繋げていく取り組みを、平成 24 年度より開始した。対象は、発達障害者支援センターに継続的に相談がある成人期の人で、関係施設を利用して、発達障害者支援センター職員と一緒に簡単な机上作業や清掃等の作業を行ってもらう。地域の障害福祉サービス事業所での体験実習や当事者会への参加の機会を提供しながら、事業所の正式利用に繋いでいく。今年度は 10 人がプログラムに参加したが、1 人が障害福祉サービス事業所の正式利用につながり、もう 1 人、体験利用した事業所の利用に向けて、手続きを開始した。事業所利用に至ったケースは少ないが、行動記録や本人、家族へのアンケート調査結果からは、個々人のコミュニケーション面や生活面、意欲の面などで良い変化が見られている。また、参加することで状態が改善し、家族との関係がよくなっているケースもあった。このように、生活支援プログラムは、所属がない発達障害者にとっての有効な社会資源になっていると考えられる。

また、本事業では、本人への支援だけではなく、発達障害の本人、家族に対して、様々な就労スタイルや地域資源があることを理解してもらい、就労に向けて必要なことを学んでもらうための、「発達障害者の就労支援について」の研修会と、発達障害者を利用対象としている福祉サービス事業所の支援技術の向上のための「発達障害者支援のための実務研修会」を実施した。どちらの研修会も好評で、「発達障害者の就労支援について」の研修会では、「就職までの流れと就職後について、わかりやすく話していただいたので理解できた。」や、「将来に向けてどのような支援をしたらよいかのヒントになった。」等の感想が得られた。また、「発達障害者支援のための実務研修会」では、福岡障害者職業センターで行っている、発達障害に特化した就労支援カリキュラムについて学び、「今日の研修で理解したことを明日以降実践したいと思う。」や、「すぐに使える資料なので、利用したい。」等の感想が得られた。

今後実践に生かせる研修会を実施していくとともに、本プログラムにおける取組や、効果について情報を発信し、地域の事業所や相談支援機関等と連携して

いくことが必要と考える。情報発信の方法や、連携の在り方が今後の課題である。

II. 事業目的

本事業では、発達障害者支援センターの相談者で、発達障害の特性や二次障害のため在宅生活が続いており、障害者福祉サービス事業所の利用や当事者会への参加が難しい人を対象に、関係施設を利用して、発達障害者支援センター職員と共に軽作業や、ボランティア体験を行ってもらう。このような活動を通して自己理解を深めたり、社会との接点を見つけていく契機としてもらうことを目的とする。また、当事者や本人を対象とした「就労支援研修会」や、障害福祉サービス事業所の職員を対象とした「実務者研修会」を実施し、本人や家族の就労に対する理解を深めたり、障害福祉サービス事業所の職員の支援技術の向上を図る。

III. 事業の実施内容

1. 発達障害者支援センターにおける作業活動

① 対象者

北九州市発達障害者支援センターに継続的に相談がある人を対象とした。対人緊張や不安が強く、長期にわたって在宅の状態が継続している人や、自己理解が難しく、高校卒業後、適切な進路選択ができないままに在宅となっている相談者を対象とした。

今年度参加した対象者 10 名の内訳を、表 1 に示す。

表 1 対象者の内訳

年齢	20 歳代：5 人 30 歳代：1 人 40 歳代：3 人 50 歳代：1 人
性別	男性：6 人 女性：4 人
診断	自閉症：3 人 アスペルガー症候群：1 人 広汎性発達障害：3 人 ADHD：1 人 未受診：2 人
手帳	精神 3 級：1 人 精神 2 級：2 人 療育 B2：4 人 療育 B1：1 人 なし：2 人
精神科通院	あり：8 人 なし：2 人
仕事経験	あり：3 人 なし：7 人（福祉サービス事業所経験者：3 人を含む）
プログラム参加期間	1 年以上～2 年未満：5 人 2 年以上～3 年未満：1 人 3 年以上～4 年未満 4 人

② 実施内容

今年度の生活支援プログラムにおける作業の実施内容を、表 2 に示す。

表 2 平成 27 年 4 月～平成 28 年 3 月までの実施内容

方法	<ul style="list-style-type: none">・北九州市発達障害者支援センターがある、北九州市立総合療育センターの会議室や相談室等を使用し、参加者と発達障害者支援センターと職員がマンツーマンで、作業を行った。・参加者のうち 2 名は、月 1 回合同で作業を行なった
頻度	<ul style="list-style-type: none">・参加者のペースに合わせて実施した。・週 1 回（3 人）、月 2 回（4 人）、月 1 回（6 人）・1 回の参加時間は概ね 1 時間。
作業内容	<ul style="list-style-type: none">・簡単な机上作業（ラベル貼り、スタンプ押し、ファイル作成、プリントの三つ折りなど）や、パソコン、清掃など。・参加者の興味関心や状態に合わせて、手順書やコミュニケーションカードを使用する。

2. 地域の障害福祉サービス事業所の体験利用の実施

① 対象者

1-①の対象者の中で、体験実習を希望した 3 人に対して実施した。

② 実施内容

参加者の特性や興味関心、居住地等に配慮して事業所の選定を行い、頻度は利用者の状態に合わせて設定した。毎回、発達障害者支援センターの職員が同行し、一緒に 1 時間程度の作業を行った。作業内容は、事業所の作業内容によって異なるが、簡単な組み立てなどの室内軽作業などである。1 名が正式利用の意向を示し、手続きを開始した。

③ 参加状況

計 3 か所の障害福祉サービス事業所で実施した。（資料 1-2）

実施状況は表 3 のとおりである。

表 3 障害福祉サービス事業所 体験利用状況

事業所	人数	体験回数
A 事業所（就労継続支援 B 型）	1 名	計 7 回
B 事業所（生活介護）	1 名	計 1 回
C 事業所（就労継続支援 B 型）	1 名	計 1 回

IV. 分析

1. 参加状況

平成 28 年 3 月 31 日現在の参加状況を、表 4 に示す。

表 4 参加状況（平成 28 年 3 月 31 日現在）

状態	人数	参加状況
継続中	7 人	・ 7 人が定期的にプログラムに参加している。 ・ 体験利用した就労継続支援 B 型事業所を正式利用する意向。現在手続きを進めている（1 人）
終了	1 人	・ 就労支援継続 A 型事業所へ移行（1 人）
中断	2 人	・ 家族の都合により 7 月より中断している（1 人） ・ 体調不良により 11 月頃より中断している（1 人）

生活支援プログラム実施の効果検証に関しては、年度当初と年度末に、Vineland-II 適応行動尺度を実施し、結果を比較した。また、活動時の行動記録からの検証を行うとともに、年度末に、アンケート調査を本人（資料 1-3）及び、家族（資料 1-4）に対して実施した。

2. Vineland-II 適応行動尺度の結果

年度始めと年度末に、実施が可能な 8 人に実施し、結果を比較した。

① 適応行動尺度

適応行動尺度の結果は表 5 のとおりである。表 6 に標準得点と適応水準の関係を示す。適応水準は、全員が適応水準が「低い」状態であった。年度始めと年度末の適応行動総合点の比較では、5 人の得点が高くなっている。

コミュニケーションの領域では、プログラム参加時に、自分の思いをより伝えられるようになってきている人（3 人）は、表出言語の得点が僅かだが上がっていた。“会話を開始する・続ける”ことができやすくなった人もいた。また、日常生活スキルでは、身辺自立（3 人）と家事（3 人）などで、以前より得点が高くなっていた。社会性の領域では、対人関係の得点が少し上がっている人が 4 人いた。

表 5 適応行動尺度の標準得点の変化

	適応行動総合点		コミュニケーション		日常生活スキル		社会性	
	年度始	年度末	年度始	年度末	年度始	年度末	年度始	年度末
A	20	26 ↑	25	31 ↑	35	46 ↑	34	38 ↑
C	20	20	20	20	26	30 ↑	25	28 ↑
D	52	53 ↑	40	40	76	73 ↓	71	76 ↑
E	40	49 ↑	22	40 ↑	76	82 ↑	55	55
F	40	40	43	43	48	51 ↑	63	61 ↓
G	25	25	43	43	20	20	26	26
H	20	24 ↑	20	31 ↑	37	53 ↑	22	26 ↑
I	40	43 ↑	43	49 ↑	68	68	44	44

表 6 標準得点の範囲と適応水準

適応水準	標準得点の範囲
高い	130 以上
やや高い	115～129
平均的	85～114
やや低い	70～84
低い	70 未満

② 不適応行動尺度

結果は、表 7 のとおりである。表 8 に評価点の範囲と不適応水準の関係を示す。

5 人の不適応行動指標の数値が僅かであるが低くなっており、状態が少し良くなっている。内在化問題が減少したのは、4 人で、睡眠の状態が改善した（1 人）、人との関わりを避けることが減った（1 人）などがみられた。また、外在化問題が減少したのは 5 人で、癩癢を起こすことが減った（3 人）などがみられた。

表 7 不適応行動指標の評価点の変化

	不適応行動指標		内在化問題		外在化問題	
	年度始	年度末	年度始	年度末	年度始	年度末
A	21	20 ↓	22	22	20	19 ↓
C	21	21	23	23	21	21
D	21	19 ↓	21	18 ↓	22	19 ↓
E	21	20 ↓	22	21 ↓	21	20 ↓
F	21	16 ↓	22	21 ↓	17	13 ↓
G	21	21	21	21	20	19 ↓
H	22	21 ↓	21	20 ↓	19	19
I	21	21	22	22	19	19

表 8 評価点の範囲と不適応水準

不適応水準	評価点の範囲
平均的	1～17
やや高い	18～20
高い	21～24

3. 行動記録の結果

参加者の行動記録から抽出したエピソードを、表 9 に示す。

表 9 行動記録から抽出したエピソード

	エピソード
対人コミュニケーション面	<ul style="list-style-type: none"> ・作業が 20 分終わったところで、まだ続けるか尋ねると、ジェスチャーで拒否する。面談終了後、何か言い忘れたことなどはないか尋ねると、家庭での困った出来事の話をする。（職員が紙に書いて確認しながら出来事を確認する。） ・「〇〇さん」「材料を」「下さい」の 3 つのコミュニケーションカードを使い、材料を要求できる。注意喚起することはまだ難しく、職員が気づくまで待っている。 ・「休憩したいです」「お茶を下さい」のカードを使用する。作業が一段落したところで、「まだ続けますか？」と聞くと、はっきりと首を左右に振る。 ・本人より、「受診に一人で入った。自分の今の状態をノートにまとめ、話しもした。」と報告がある。悩み事や状態が悪い事を職員に話す。 ・同室で作業をしている相談者が、以前の担当職員のことを職員に質問しているのを聞いて、自ら説明する。 ・障害福祉サービス事業所の体験利用を勧められると、「誰かと一緒に働くことは、まだ難しい」と話す。 ・来所時に、ドアをロックし、「〇〇です。△△さんお願いします。」と言えるようになる。（以前は、担当以外の職員が出ると固まっていた。） ・趣味の映画以外の話題でも会話をすることが出来る。 （障害福祉サービス事業所体験利用） ・障害福祉サービス事業所の見学時、事業所スタッフに、「利用者は何人ですか。」、「(商品の) 台紙を作ることならできそう。」等自分から話す。
作業面	<ul style="list-style-type: none"> ・封筒のシール貼りの作業の途中で、普段の手袋から指先が出ている手袋に替えるが、しばらくすると、元に戻す。「やりやすいのはどちらかと思い、替えてみました。やはり、いつもの手袋の方がやりやすかったです。」と話す。 ・テンポ良く、封筒にゆうメールのスタンプ押しをする。「この作業は、簡単でやりやすい」と話す。 ・「一番得意な作業は、ハサミで紙を知る作業（メモ用紙作り）である。宛名シールを貼る作業は好きな方である。」と話す。 （障害福祉サービス事業所体験利用） ・事業所の利用については、「賃金より作業内容や慣れた環境を重視したい」と希望を言う。また、「最初のうちはつばさの職員に同行してもらいたい」と言う。
自信や意欲面	<ul style="list-style-type: none"> ・以前利用した事業所の体験利用を拒否するが、行きたくない理由を紙に書いた選択肢の中から選んでもらうと、「他の事業所も見てみたい」を指差す。どのような事業所が良いのかも、選択肢の中から指差しで示す。後日、体験実習に行く事業所の範囲をバス停名で示して伝えると、「この範囲ならいける。」と言う。 ・本人より、頻度と時間を増やしたいという希望がある。 ・自閉症啓発デー記念イベント（当事者の講演会）に参加する。 ・作業回数を増やしたい、ソーシャルクラブも参加してもいい、と話しがある。 ・「(就労継続支援) A 型事業所で働きたい。」と自分から申し出る。体調は良く、「週

に2～3回、ウォーキングもしている」ということである。

- ・「調子がよく、若者サポートステーションにも行き始めた。」「やる気になってきているので、週1回来所したい。」と希望が出る。また、前回の相談の帰りに、商業施設に寄って遊んで帰ったと報告がある。
- ・生活リズムが整わず午後から面談を行っていたが、午前から面談に来れるようになった。
- ・「帰宅途中に、お気に入りのパスタ屋に寄ることが楽しみになっている」と話す。
- ・本人より「外に出る機会を増やしたいので、受診日とつばさに来る日を別にしたい。」と発言がある。

4. プログラム参加している本人へのアンケート調査結果

年度末の時点で参加していた8人中、了解を得られた7人に対して実施した。アンケート記入時は、個々人の理解やコミュニケーションの特性に配慮して、インタビューや記述式で行った。

① 「生活支援プログラムに参加している目的」を、表10に示す。

表10 「生活支援プログラムに参加している理由は何ですか」(複数回答可)

理 由	人数 (人)
ア 日中活動の場が欲しいから。	3
イ 家族以外の人との関わりをもちたいから。	3
ウ 作業(仕事)のスキルを身につけたいから。	2
エ コミュニケーションの練習をしたいから。	6
オ 福祉サービス事業所等の利用の準備がしたいから。	2
カ 参加を勧められたから。	3
キ わからない。	0
ク その他	0

② 「活動には慣れたか」を、表11に示す。

表11 「活動には慣れましたか。」

	慣れた	少し慣れた	変わらない	慣れない	負担になっている	わからない
人数(人)	4	3	0	0	0	0

<その理由について>

- ・参加し始めて、時間が経ったから。(2)
- ・来ているうちに慣れた。
- ・以前は作業が終わった時に、つばさ職員に伝えることができなかったが、今はカードを使って伝えることができるようになった。
- ・ドキドキしなくなった。スタッフと話ができるようになった。
- ・作業には慣れたが、作業所の利用者とは話すことができなかった。
- ・無回答 (1)

③ 「生活支援プログラムの内容に満足しているか」を、表 12 に示す。

表 12 「生活支援プログラムの内容に満足していますか。」

	満足である	少し満足である	ふつう	少し不満である	不満である	わからない
人数(人)	4	2	0	0	0	1

<その理由について>

(満足・少し満足である)

- ・特に不満がないため。
- ・作業をする時に失敗したらどうしようという不安は今もあるが、作業内容自体は難しくなく自分には丁度良いと思う。
- ・色々話を聞いてもらえて、アドバイス等ももらえるから。
- ・つばさのスタッフとは、話ができるようになってきた。
- ・継続できているところ。普段はほとんど家から出ないため、自分にとってつばさへ来ることは重要である。外へ出る良い機会になっている。

(わからない)

- ・目に見える成果が感じられない。(例えば、作業後に報酬がもらえる等)
- ・無回答 (1)

④ 「生活支援プログラムを開始して、自分自身の理解についてや、生活の中で変化を感じるがあったか」を、表 13 に示す。

表 13 「自分自身の理解についてや、生活の中で変化を感じるがあったか。」

<作業スキル等に関する変化>

- ・糊付けの作業は苦手である。
- ・事業所の見学に行き、物作りのような作業は自分に向いていないと思った。
- ・自分に何が向いているのか、どんなことができるのかまだわからない。
- ・作業が意外とできることに気づいた。
- ・自分の得意分野が見つかった。

<対人面・コミュニケーションに関する変化>

- ・つばさに来ることで、家族以外の人と話すことができています。
- ・店員に「～はありますか？」と聞いたり、「～を取って下さい。」と頼んだりできるようになった。男性の店員にも声を掛けられるようになった。
- ・家族以外の人と話をするようになった。人に慣れた。(つばさスタッフ)

<生活面に関する変化>

- ・買い物や図書館などに出かけることが増えた。
- ・朝早く起きて、規則正しい生活を送れるように心掛ける。

<意欲や情緒面に関する変化>

- ・少し前向きになった。発達障害について、向き合うようになった。
- ・泣かなくなった。フラッシュバックがなくなった。
- ・(参加することが)気晴らしになっている。

⑤ 「今後の生活や仕事についてどのような希望をもっているか」を、以下に示す。

- ・できたら仕事をしたいけど、普通の仕事は無理だと思う。“まずは作業所で”と思っている。
- ・仕事をするとしたら、体力的に週に3日が限度だと思う。
- ・カラオケに皆で行けるようになりたい。(家族、つばさ職員、当事者会の仲間と、まずは行けるようになりたい。)
- ・まずは現状維持をしたい。そのため、今後の展望は特にない。
- ・1人で公共交通機関を利用して、買い物など外出をしたい。
- ・イベントの裏方(チラシ配り、椅子並べ等の準備)の仕事がしてみたい。
- ・パソコンが扱えるようになったらいいなと思う。
- ・漫画家になりたい。
- ・よくわからない。

⑥ 「生活支援プログラムについての要望」を、以下に示す。

- ・今は次のステップは考えていないので、特に要望はない。今は、月に3回(医療機関とつばさ)外へ出ることが精一杯。月に3回外へ出ると、とても新鮮に感じる。
- ・作業の回数を月1回から2回へ増やしたい。
- ・特にないが、パソコン作業があればやってみたい。
- ・漫画や絵を描きたい。
- ・特になし(3)

プログラムに参加している理由としては、「コミュニケーションの練習をしたいから」が6人で最も多く、「日中活動の場が欲しいから」、「家族以外の人と関わりたいから」、「参加を勧められたから」が3人で次に多かった。「福祉

サービス事業所の利用の準備がしたいから」と答えたのは2人で、すでに体験利用を経験し、利用の意向を示している参加者であった。

活動に対して、7名全員が活動に「慣れた」または、「少し慣れた」と答えている。活動への満足度では、6名が「満足である」または、「少し満足である」と答えているが、1名は「わからない」と答えている。理由は、「目に見える成果（報酬）が見られないから」ということである。

自身の変化として、「自身の得意分野が見つかった」や、「物づくりのような作業は自分に向いていない」など、作業面での気づきがあった人や、「外に出る良い機会となっている」や、「家族以外の人と話すようになった」などのコミュニケーション面での変化に気付いた人がいた。

プログラムへの要望としては、「作業時間を伸ばしたい」や、「パソコンをしたい」などがあった。

5. 家族へのアンケート調査結果

アンケート調査への協力が可能な、8人に実施した。

① 「生活支援プログラムの内容に満足しているか」を、表14に示す。

表14 「生活支援プログラムの内容に満足していますか」について

	満足である	少し満足である	ふつう	少し不満である	不満である	わからない
人数	5	1	1	1	0	0

<その理由について>

(満足・少し満足である)

- ・明るくなった。意欲的になった。
- ・つばさに行く日を楽しみにしている。
- ・映画の話だと、聞かれても返事が出来るようになったこと。先日は、映画以外の話も話していたので嬉しく思った。
- ・自閉症・運動機能・両手の炎症など多数の障害が絡み合った状態なので、指導も大変だろうと思い感謝している。
- ・本人のことを理解している人から支援して貰えるので。

(ふつう)

- ・つばさに行く回数が少ないので。

(少し不満)

- ・簡単な机上作業のみ行っている。

- ② 「生活支援プログラムを開始して、本人の生活の中で変化を感じることがあったか」を、表 15 に示す。

表 15 「生活支援プログラムを開始して、本人の生活の中で変化を感じることがあったか」

<p><生活面に関する変化></p> <ul style="list-style-type: none">・つばさに行く時以外は、一人では外出することがなかったが、最近一人で外出して、百円ショップや、スーパーに本を見に行くことがある。・昨年は、2～3日食事もしないで寝ていることがあったが、今年の冬は、夕食の時間頃には起きてきて、「頭が痛かったので起きられなかった」など、理由を言うようになった。
<p><コミュニケーションに関する変化></p> <ul style="list-style-type: none">・開始前は体も心も石の様に固かったが、今は心を開いてくれるようになった。・自分の気持ちを少しずつ言えるようになった。・担当職員とのコミュニケーションが深まっている。
<p><意欲や自信に関する変化></p> <ul style="list-style-type: none">・積極的になり始めた・何でも「自分でする」と言うことが多くなり、精神的には落ち着いて安定した日常生活をしている。両手の炎症が治らず作業体験にも影響するので大変気にしている。・少しだが、就労への興味を持つことが出来た様に感じる。
<p><その他の変化></p> <ul style="list-style-type: none">・少しだけ大人になった様に感じます。我慢を覚えてきている。・2、3年前のような、自殺未遂を起こすようなことはなくなった。

- ③ 「生活支援プログラムを開始して、ご家族のご本人に対する理解や対応について、変化を感じることがあるか。」を以下に示す。

<ul style="list-style-type: none">・母である私自身が子供の不便さを少しわかるようになった。自信がないために虚勢を張ってしまうこと等、少し感じるようになった。・本人の行動をなんとか治そうと思って、いつもトラブルになっていたが、治すことは出来ないとわかった。本人のありのままを受け入れ、本人のやり方を尊重するように心掛けるようになった。母親の私自身の行動が影響していることもわかった。・特に母親とのコミュニケーションが深まっている。本人の自主性を強化している。・娘の気持ちを少しでも理解する事と、なるべく不安にならない様に、自信が持てる様にしてあげたいと思っている。・本人は色々言われるのが嫌な性格なので、つばさに行き始めてからは注意等一切言わず、ただ見守るだけにしている。・あせらずゆっくり能力向上に努めてくれればよいと思う。時間がかかっても働く意欲だけは持ち続けてほしいと思う。・特に対応していないが、就労への興味を持ってくれることは嬉しく思う。・本人の嫌がることはなるべく言わないよう、心がけている。

④ 「今後のご本人の生活や仕事についてどのような希望をもっているか」を、以下に示す

- ・つばさに行く回数が月に2回なので、回数を増やして出来るだけ外の空気をもっと楽しんでもほしいと思っている。
- ・現在、起きる時間が昼、夕方など色々なので、毎朝同じ時間に起きられるようにならないかと日々思っている。
- ・少しずつ仕事が出来るとなればと思っている。自分も人の役に立てると思えて、自信につながっていければいいと思う。
- ・少しずつでも自信を持ち、生活が出来るとなればと思う。
- ・効率、利益を必要とする組織の中で働くのは無理だろうと思うので、マイペースにゆっくり働ける環境をつくれなものかと思案している。
- ・アルバイト等から少しずつ仕事に結び付けたらよい。
- ・出来たら自分に合った仕事などが見つければ良いと思う。
- ・親も年をとって行くので、何年かかかっても、しっかり仕事が出来るとなると自立生活が出来ることが一番の希望である。
- ・本人が自立して家庭生活および社会生活を送れるようになることである。

⑤ 「生活支援プログラムについての要望」を、以下に示す。

- ・ボランティア、作業体験等行い、就業場の紹介を行ってほしい。
- ・参加者が、自分の体験を話し合う機会が出来れば大変嬉しい。
- ・こだわりへの対策として、2度確認したら必ず次の作業手順に進むことを基本ルールとし、これが習慣になれば作業能率が向上するのではないかと思う。
- ・特にない (2)
- ・無回答 (3)

活動への満足度については、6人が、「満足である」、「少し満足である」と答えている。「ふつう」と答えた1人は、参加回数の少なさを理由として挙げており、「少し不満」と答えた1人は、作業内容が簡単であることを理由として挙げています。

参加者の変化点として、「(家で)心を開いてくれるようになった」や、「何でも“自分でする”と言うことが多くなり、精神的には落ち着いて安定した日常生活をしている」などの回答があった。

家族の変化点としては、「本人の自主性を強化している」、「見守るようにした」、「ありのままを受け入れるよう、心掛けるようになった。」などの回答があり、6人が何らかの形で関わり方が変わったと答えている。

V. その他の取り組み

1. 発達障害のあるご本人および家族のための就労支援研修会

プログラム参加者やその他の発達障害当事者とその家族が、障害に応じた様々な働き方や、就労に向けて必要なことを学んでもらうために、平成 28 年 1 月 30 日（土）に研修会を実施した。（資料 1-5）また、研修会終了後にアンケート調査を実施した。（資料 1-6）

研修会参加人数は 95 人、アンケート回収数は 92%であった。

アンケート記入者の内訳を、表 14 に示す。

表 14 アンケート記入者の立場について

	本人 10代	本人 20代	本人 30代	家族	支援者	その他	合計
人数	3	12	8	33	26	6	88

アンケートの結果について、 図 1 から図 2 に示す。

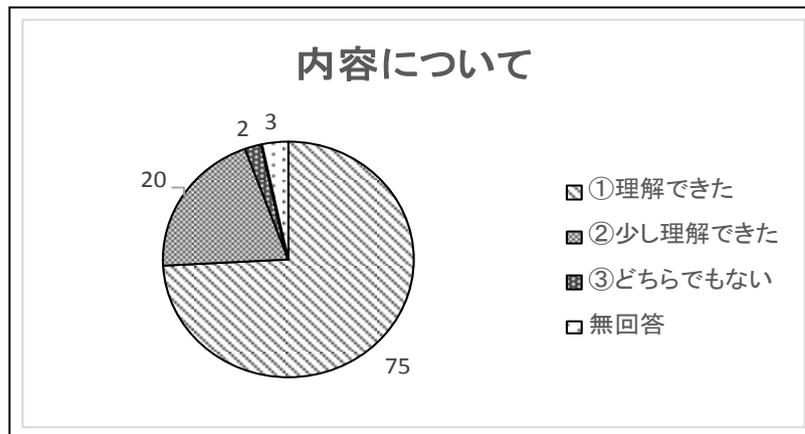


図 1 「講義の内容について」の理解度

図 1 の「講義の内容について」理解できたか、の主な内容を以下に示す。

<当事者の発表について>

- ・当事者の話を聞いて良かった。(4)
- ・内容がわかりやすかった。(4)
- ・当事者の経験や想いを聞いて、仕事への思いを熱くした。

<講義について>

- ・就職するうえで大切なことが分かった。(3)
- ・資格取得だけでなく、生活面も大切だとわかった。(2)
- ・しごとサポートセンターについて、詳しく知ることが出来て良かった。
- ・社会人として自立する訓練が必要だとわかった。
- ・就職までの流れと就職後について、分かりやすく話してもらったので理解できた。

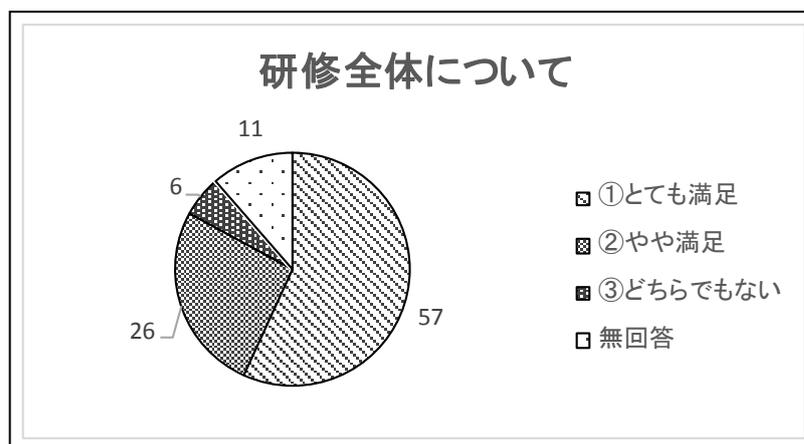


図2 「研修会全体を通して」の満足度

図2の「研修会全体を通して」満足できたか、の主な内容を以下に示す。

- ・体験者発表が良かった。(4)
- ・体験発表が大変素晴らしかった。本人が、どう困って、現在に至るのが、とてもよく分かった。
- ・当事者、企業、支援者の話が聞けて良かった。
- ・就労に向けた心構えを持つとともに、サポート体制があることを知れて良かった。
- ・このような研修会に、また参加したい。引き続き、就労研修会は続けていただきたい。

図1の結果から、講義の内容については、参加者の95%が概ね理解しており、図2の結果からは、83%が研修会に概ね満足していることが分かった。

参加案内は、生活支援プログラムの参加者全員と、つばさに相談がある高校生以上の本人、就労支援機関、相談機関等に行い、市政だよりによる募集も行った。生活支援プログラムに参加している本人や保護者の参加は、今年はなかったが、必要に応じて、個別に内容を伝達していく。

アンケートの中には、今後の要望として、「具体的な支援事例をもう少し聞きたかった」(5)や、「質疑の時間がもっと欲しかった。」などの意見があり、参加者の就労支援に対する関心が高いことが伺えた。しかし、講義の内容については、家族、支援者により、聞きたい内容が違っているため、対象や開催の方法について検討していく必要がある。

2. 障害福祉サービス事業所職員に対する実務研修会の実施

プログラム参加者にとっては、障害福祉サービス事業所の利用が目標の一つであるが、北九州市において、発達障害に特化した事業所は1カ所しかなく、事業所の利用が継続しないことも少なくない。事業所の発達障害の理解を進め、支援技術の向上を図ることは重要な課題であるため、今年度も障害福祉サービス事業所の職員を対象とした研修会を平成28年3月13日(日)に実施した。

(資料1-7)

本研修会では、生活支援プログラムについての事業説明を行い、障害福祉

サービス事業所の体験利用等における、理解と協力を求めた。

対象は、障害福祉サービス事業所において成人の発達障害者を支援している職員や、ひきこもり支援センター、若者サポートステーション等の支援機関職員とし、研修会終了後にアンケート調査を実施した。(資料 1-8)

研修会参加人数は人、アンケート回収数は 42 人、アンケート回収率は 95%であった。

アンケート記入者の内訳を、表 15 に示す。

表 15 参加者内訳について

	障害福祉サービス事業所							相談 機関	その 他	無回 答	合計
	就労 移行	就労継 続支援 A型	就労継 続支援 B型	自立 訓練	生活 介護	入所 施設	その 他				
人数	16	4	16	6	3	2	1	3	3	0	54

アンケートの結果について、図 3 から図 4 に示す。

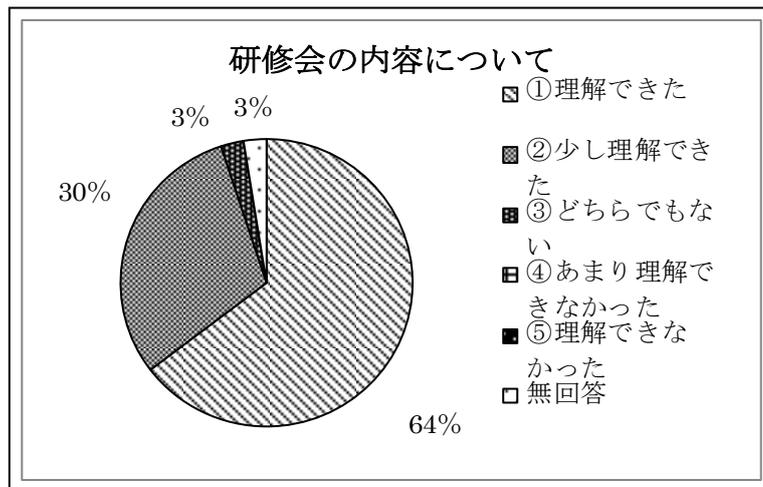


図 3 「研修会の内容について」の理解度

図 3 の「研修会の内容について」理解できたか、の主な内容を以下に示す。

- ・実践の中で「必要」と思ってやってきたことの根拠が理解できた。
- ・発達障害者へ就労支援を行う上で、ナビゲーションブックを活用した支援は有効であると感じた。
- ・配布された資料が役に立ちそうだった。
- ・学校の中の実習の振り返りをもっと丁寧に行い、本人の努力と周囲の理解を進めていけるようにした。

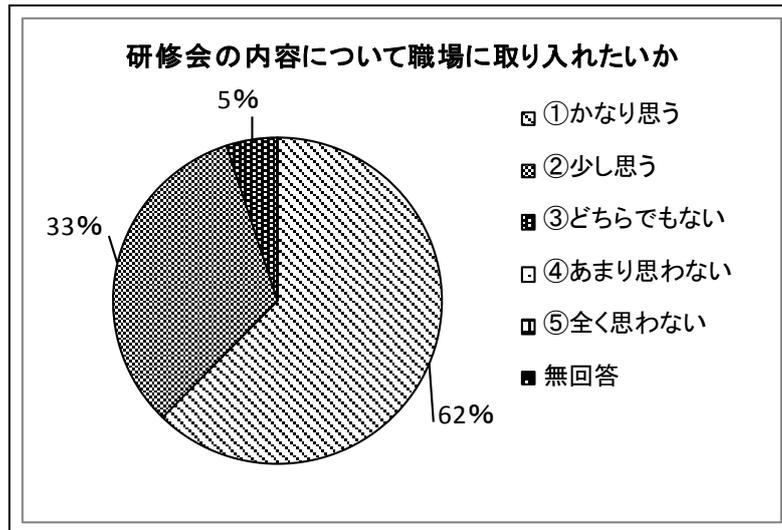


図4 「研修会の内容について」職場に取り入れたいか

図4の「研修会の内容について」職場に取り入れたいか、の主な内容を以下に示す。

- ・今日の研修で理解したことを明日以降実践したいと思う。
- ・すぐに使える資料だったので、利用したい。(2)
- ・ひきこもりの方への支援方法に取り入れたい。
- ・モニタリング、個別支援計画などに役立てたい。

図3の結果から、研修会の内容については、参加者の64%が「理解できた」、30%が「少し理解できた」と答えており、図4の結果からは、95%が研修会の内容を職場で取り入れたいと考えていることが分かった。

障害者職業センターでは、就労に有効な支援ツールを数多く開発しており、講師の話や提供された資料は、現場で使用可能なワークシート等であった。現場で取り入れてみたいという意見が多くあったが、「取り組み事例、モデルをもっと紹介してもらいたかった。」(2)等の意見もあり、演習の時間を更にとることが出来れば、もっと理解が深まったのではないかと考えられる。

高機能の発達障害の方の支援では、支援方法が確立しておらず、より個人に合わせた個別的な支援をどのように行っていくかは、まだまだ手探りの状態であるため、今後もこのような研修の場を提供していきたいと考える。

IV. 考察

生活支援プログラム参加者は、長期にわたり在宅生活が続いた人が多いため、個々人の変化のためには長い期間を要す。しかし、参加者個々人の変化を追っていくと、この一年間の中でも、参加状態に変化が見られている。

参加者の一年間の主な変化を、表16に示す。

表 16 参加者の一年間の主な変化

	参加開始時期	今年度の状態（主な変化）
A	H26年 8月	面談の中で、家庭での困った出来事を相談することが出来たり、興味関心の幅が少しずつ、広がっている様子で、絵以外に持参するものが増えた。福祉サービス事業所の体験利用について、前向きになってきており、事業所を2箇所見学した。そのうち1カ所を3月末に体験利用した。
B	H26年 6月	今年度は、本人の意志により時間を10分延長したり、コミュニケーションブックを導入することができた。緘黙の状態であるが少しコミュニケーションができやすくなった。福祉サービス事業所の体験利用も一度行ったが、家庭の事情により、8月末より参加を見合わせている。
C	H24年 7月	緊張が強く、参加開始時は、行動が止まり、スタンプ押しの1時間の目標が5枚であったが、現在は作業スピードが速くなっている。また、プログラム参加者のGと月1回合同で作業を行ってきたが、Gの作業状況を気にしたり、Gの質問に答えることもあった。
D	H24年 4月	「就労継続支援A型事業所で働きたい」と申し出があったため、職員とハローワークへの相談、事業所見学（3箇所）を行った。10月に面接を受けた事業所は不採用となるが、12月には別の事業所を受け、正式採用となる。出勤状況は順調で、「事業所で嫌なことがあっても、爆発する前には職員に相談できている。」と話す。
E	H25年 8月	父親が車で送迎していたが、自身でJRを利用し通い始める。若者サポートステーションにも月1~2回通い、3月には清掃のボランティア活動に参加した。共通の趣味を持つ人と話しが出来て良かったと報告がある。
F	H24年 8月	福祉サービス事業所の正式利用に向けて、前年度までに体験利用した事業所を、今年度も体験利用した。現在は、正式利用に向け手続きを進めている。職員に自分から話題提供をしたり、冗談を言えるようになり、本人も「家族以外の人とも緊張せず話しが出来るようになってきた」と話す。
G	H24年 6月	作業担当職員が変更になると告げられると、自分から「今までお世話になりました。ありがとうございました。」と言う。また、作業の得意・苦手、好みについて自分から話すことができおり、自発的な発言が少しずつ増えてきている。福祉サービス事業所の見学を行うが、「興味が持てない」と体験は見合わせた。
H	H26年 4月	生活リズムが整ってきて、午前から参加することができるようになった。本人の趣味である、映画等の話を自分から発信することが増え、趣味以外の話題でも、少しずつ会話が出来るようになってきている。また、家庭で部屋に閉じこもることがあるが、嫌だったことを来所時に話すことが出来るようになってきた。

I	H26年 10月	月1回の来所が習慣化し、「帰りにお気に入りの飲食店に寄って食事をすることが楽しみになった」と話す。また、受診日に来所していたが、10月には、「外に出る機会を増やしたいので、別の日にしたい」と申し出る。また、2月には、「フラッシュバックがなくなった」と話す。
J	H26年 6月	事業所の見学を行い、10月末より体験利用を行う予定であったが、家庭の事情から体験は見送る。本人の体調が整わない状態が続き、11月以降のプログラム参加を中断している。

今年度、1人は障害福祉サービス事業所の利用を開始し、もう1人利用に向けて手続きを始めた。2人ともプログラムを開始した平成24年より参加しているが、前者は、一旦就労継続支援B型事業所を半年間利用したが、辞めてプログラムに戻り、就労継続支援A型事業所を利用するに至った。現在、相談するスキルが向上し、事業所で嫌なことがあっても、事業所の職員に相談しながら乗り越えていくことができている。後者は、同じB型事業所を3年間にわたり体験利用して、正式利用を決めており、両者とも長い時間かかったが、それぞれのペースや進め方で、次の段階に進むことが出来た。その他の参加者も、個々人の変化を確認していくと、継続参加している7人は、行動記録やVineland-II適応行動尺度の結果から、状態像が少しずつ良くなっており、特に、コミュニケーション面での変化が見られている人が多かった。具体的には、職員からの質問に答える事も難しかった人が自身の家庭での事などを少しずつ話せるようになっていたり、挨拶ができやすくなった人がいた。また、アンケートでは、「会話をすることに少し自信を持てるようになってきた」と答えた人などがいた。

家庭生活の面においても、プログラム参加はよい変化をもたらしていると考えられる。生活リズムが整ってきたり、自立心が芽生えて、身辺自立が出来やすくなった人や家事に取り組み始めた人もいた。また、定期的につばさに通うことで、外出の機会が増え、帰りに本屋や飲食店、ゲームセンターなどに立ち寄るようになり、生活の中に楽しみが増えた人もいた。アンケートの結果からも、本人の変化は、家族にとっての安心や希望にも繋がっていると考えられ、家族との関係がよくなってきた人もいた。

生活支援プログラムでは、本人の特性や経過をよく知っている職員と取り組むということや、苦手なことばでのコミュニケーションを求められないこと、視覚的な作業提示などがあることが参加できやすい理由の一つになっていると想像される。また、作業だけでなく、来所時に本人の興味関心に関する話を聞くことで、少しずつ家庭での出来事や自身の悩みも話しやすくなってきており、相談することが出来るようになってきた人もいる。

プログラムの実施を通して、コミュニケーションの支援や視覚支援の重要性を感じており、今後も、対応する人や場所が変わっても安心して利用できる状況をつくるため、視覚支援を積極的に取り入れていきたい。また、参加

者の変化には長い時間を要するため、不安や不満を感じている家族もおられる。家族と、本人、支援者が、本人の変化点を確認し合ったり、目標を共有できる場を適宜設け、長期的な視点で支援を行っていくことが出来る環境をつくることも大切と考えられる。

発達障害の特性や二次障害のために、在宅生活が続いている人にとって、生活支援プログラムは、有効な社会資源の一つと考えられ、今後も継続して実施していきたい。しかし、個別対応を要することや、個々人にあった活動内容を長期に提供する必要があるため、つばさだけで担うことは難しい。今後は、地域の障害福祉サービス事業所等との連携が望まれるが、そのためにも、生活支援プログラムの取り組みと成果について、発信していくことが必要である。つばさで行っている障害福祉サービス事業所職員対象の研修会では、事業説明の中で生活支援プログラムの取り組みを紹介し、事業所体験利用等への協力を求めているが、今後も機会を捉えて発信していきたい。また、発達障害のある人は、特性や経験、二次障害の有無や程度等様々であるため、“こうすればよい”という明確な支援方法があるわけではない。事業所職員のスキルアップのためには、今後も、より実践に結び付くような内容の研修会を実施したり、各事業所において、事例を積み上げてもらうことが重要である。個々のケースを通して、職員の障害理解や支援技術を向上することができるよう、つばさの機関コンサルテーションの機能をさらに強化していくことも必要と考える。